

September 2026

京都大学総合博物館 ニュースレター



アケボノゾウ全身骨格の復元像 *2～3頁に関連記事

2026 年度企画展「日本のゾウ化石」.....	2
2026 年度コレクション展「鉱床—日本列島の金・銀・銅鉱石」.....	4
永益英敏教授最終講義	5
文化財発掘 XII「模型からみる文化遺産」講演会	5
新任スタッフ紹介.....	6
招へい研究員の紹介.....	7
インドシナ陸生脊椎動物種多様性の国際共同研究が終わる	8
ベトナム・ラオスの4 大学での脊椎動物種多様性ワークショップに参加して	9
総合博物館コレクション研究〈27〉上塩冶築山古墳金工品の科学調査	10
総合博物館レクチャーシリーズ（第168 回）.....	12
大学博物館等協議会・日本博物科学会に参加して	12
子ども博物館だより〈11〉.....	13
体験と知識を結びつける	
元素周期表であそぼう！	
研究資源アーカイブ通信〈36〉アーカイブズの整理技法に関するノート（3）	14
総合博物館日誌（2026 年3 月～6 月）	16

2026 年度企画展 日本のゾウ化石

開催期間：2026年7月8日(水)～9月13日(日)

現生のゾウの仲間は、アジアに生息しているアジアゾウとアフリカに生息しているアフリカゾウの2属のみですが、日本列島からもこういったゾウの化石がたくさん見つかっています。京都大学には、こういったゾウ化石の標本が多数保管されていて、そのなかには日本最古のゾウ化石であるアネクテンスゾウ（ゴンフォテリウム・アネクテンス *Gomphotherium annectens*）や有名なナウマンゾウ（パレオロクソドン・ナウマニ *Palaeoloxodon naumanni*）の模式標本が含まれています。今回の企画展



図1：展示の様子

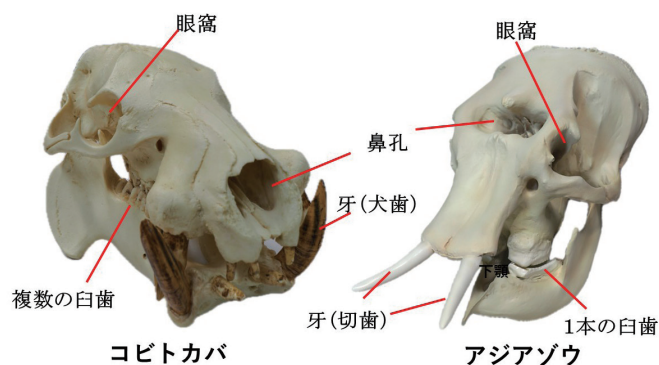


図2：カバとゾウの頭骨の比較



図3：アネクテンスゾウの上下顎

では、こういった京都大学が所蔵している日本のゾウ化石と東南アジアのミャンマーなどから見つかったゾウ化石と比較しながら、ゾウの進化について考えてみました(図1)。

ゾウの特徴として思い浮かぶのは、長い鼻と立派な牙ですが、頭骨を見てみるとその仕組みが理解できます(図2)。たいていの動物では鼻面(吻部)が長く、上下顎に複数の歯が並んでいて、犬歯が牙状に発達します。これに対して、ゾウの頭骨は上下に高くなっていて、鼻面が短くなっています。歯は片側の顎に1本しか生えておらず、上顎の切歯が発達して牙になっています。また、顔面の真ん中にある∞状の穴が鼻の穴(鼻孔)です。このような現生のゾウの特徴は、長鼻類の長い進化をへて形成されました。

長鼻類の起源は暁新世のアフリカ大陸と考えられていて、最も古い化石はモロッコの暁新世中頃(約6,000万年前)の地層から見つかったエリテリウム *Eritherium* という大きなネコくらいの動物です。沼沢地に生息していた半水棲の動物で、まだ長い鼻や牙は持っていませんでした。始新世～漸新世になると、長鼻類の大型化傾向が顕著になり、鼻と牙が次第に長くなってきますが、現生のゾウと違って上下の顎に牙が生えていました。しかし、前期中新世に東アフリカで出現したデイノテリウム類というゾウでは、牙は下顎にだけあり、しかも不思議なことに下後方に湾曲して伸びていました。彼らは現生のゾウとは違う系統になるのですが、アフリカ大陸からユーラシア大陸に進出し、その子孫は東アフリカで更新世まで生き残っていました。さらに、後期漸新世～前期中新世には、アフリカ大陸で様々な長鼻類が出現します。マムート科のゾウはマストドンゾウとも呼ばれ、歯の咬頭が丸味を帯びていることが特徴です。その一部はアフリカからユーラシアに進出し、北アメリカを経て南アメリカまで到達しました。

マムート科に続いて出現したのがゴンフォテリウム類というグループで、このゴンフォテリウム科に含まれるアネクテンスゾウの化石が岐阜県可児市で見つかっています(図3)。このゾウは、これまでに日本でみつかった最古(約1,900万年前)のもので、ゴンフォテリウム類の化石記録としてもかなり古い年代です。最

近になって、島根県出雲市の約 1,300 万年前の地層からもゴンフォテリウム類の未定種化石が見つかったことが判明しています。また、宮城県仙台市の約 500 万年前の地層からも、シノマストドン・センダイクス *Sinomastodon sendaicus* (和名：センダイゾウ) という別のゴンフォテリウム科の化石が見つかっています。

一方、主に東日本の約 1,800 ～ 1,400 万年前の地層からは、ゴンフォテリウム科よりも進化したステゴロフォドン・シュードラチデンス *Stegolophodon pseudolatidens* (和名：シュードラチデンスゾウ) の化石が見つかっています (図 4)。この仲間はステゴドン科に含まれ、稜を形成する咬頭の数が増え、その稜の数も増加しています。現生のゾウと違ってステゴロフォドン属の上顎の牙は下方に湾曲しています。ステゴロフォドン属は東南アジア大陸部で進化したと考えられているのですが、日本からみついているステゴロフォドン属の化石はかなり年代が古いので、この属の進化史を再検討されるかもしれません。

また、500 万年前以降は、日本各地でステゴドン科ステゴドン属 *Stegodon* の化石が出現します。ステゴドン属では、現生のゾウと同じ様に上下顎の片側に 1 本の歯しか生えていません。ほとんどのホニウウ類で先に生えた乳歯は下から生えてくる永久歯に置き換わるようになっているのですが (垂直交換方式)、ゾウでは臼歯や牙 (切歯) が大型化して重くなったため、先に生えた歯が咬耗すると後から生えてくる歯に押し出されて脱落して交換されるのです (水平交換方式)。

日本から見つかる初期のステゴドン属であるステゴドン・ミエンス *Stegodon miensis* (和名：ミエゾウ) は、生息域が狭い日本で小型化しながらステゴドン・オウロラエ *Stegodon aurorae* (和名：アケボノゾウ) に進化しました。今回の企画展では、滋賀県多賀町で見つかったアケボノゾウの全身骨格の復元像を展示しています (表紙図)。日本列島に広く分布していたアケボノゾウは約 70 万年前に絶滅し、約 50 万年前に大陸から別のステゴドン属であるステゴドン・オリエンタリス *Stegodon orientalis* (和名：トウヨウゾウ) が日本に渡ってきました。

中期更新世には寒冷化に伴って、北方系のマムーサス属 (通称マンモスゾウ) が日本にやってきました。日本の固有種とされるマムーサス・プロトマンモンテウス *Mammuthus protomanmonteius* (和名：ムカシマンモス) や、シベリア地域に広く分布していたマンムーサス・プリミゲニウス *Mammuthus primigenius* (和名：ケナガマンモス) などの化石が北海道や本州などから見つかっています。



図 4：シュードラチデンスゾウの上顎と下顎



図 5：ナウマンゾウの下顎 (模式標本)

約 33 万年前になると、現生のアフリカゾウに近いゾウが日本に渡ってきたようです。明治時代に東京大学で地質学を教えていたハインリッヒ・ナウマン博士が、1881 年に横須賀でみつかったゾウの化石を報告しました。それから 40 年程経って、静岡県浜松市で非常に状態のよい化石が見つかり、これを元に当時京都帝国大学にいた横山次郎博士がナウマンゾウと命名しました (図 5)。属名や種名はその後何度も変更されましたが、現在ではパレオロクソドン・ナウマニ *Palaeoloxodon naumanni* として確定されています。

この様に日本列島から見つかるゾウの化石は約 10 種類にのぼり、最低でも 8 回は日本に渡ってきたようです。見かけによらず、ゾウは海を渡るのが得意なのです。しかし、これほどたくさんいた日本のゾウたちは、なぜ絶滅してしまったのでしょうか？いろいろな種類のゾウの絶滅原因が全て同じであるとは限らないのですが、おそらく主な原因は巨大な体を維持するための植物性の食物が足りなかったのでしょう。環境変化により、こういった食物が十分に得られなくなった時に生き残ることができなかったのだと考えられています。

(総合博物館 教授 高井正成)

2026 年度コレクション展

鉱床—日本列島の金・銀・銅鉱石

開催期間：2026 年 4 月 22 日（水）～ 6 月 14 日（日）

このたびコレクション展と銘打った小規模な展示を実施しました（図 1）。「鉱床」と題した通り、当館に収蔵されている日本全国の鉱石標本を陳列する展示です。今回はその中から、特に「金・銀・銅」の鉱石に焦点を当てました。展示内容についてはパンフレット（京都大学情報リポジトリへ掲載予定）を参照いただくこととし、ここでは展示に至るまでの経緯についてご紹介します。

今回の展示構想は、昨年度にいただいた貴重な寄贈標本に端を発します。昨年 6 月、当館の研究協力者である西山孝名誉教授のご紹介により、鹿児島県の菱刈鉱山（操業：住友金属鉱山株式会社）を見学させていただく機会に恵まれました。菱刈鉱山は世界有数の金品位を誇る、日本国内では数少ない現役稼働中の金属鉱山です。

かつて日本には数百箇所を超える金鉱山が存在し、長らく佐渡金山が日本一の産金量を誇っていました。しかし、1981 年に菱刈鉱山が発見されると、その圧倒的な品位により、わずか 40 年間で佐渡金山の約 3 倍に並ぶ 260 トンもの金を産出し、瞬く間に日本一の大金山となりました。当館には明治から昭和期にかけて現役だった鉱山由来の貴重な高品位標本が多数収蔵されていますが、この度、現代を代表する菱刈鉱山からも研究・教育への活用を目的として金鉱石標本をご寄贈いただきました。これらの素晴らしい標本の存在を皆様にお伝えしたいと考えたのが、本展示を開催したきっかけの一つです。

次いで本展示の開催を後押しすることとなったのは、島津公爵家（株式会社島津興業）が保管してきた山ヶ野（やまがの）金山の組標本と、多田銀山史跡保存顕彰会が保管してきた銀銅鉱石です。鹿児島県の山ヶ野金山は、江戸時代より島津家が開発を進めてきた歴史ある鉱山です。1907 年頃の近代化の際、各鉱脈の鉱石を集めて金銀の品位を記載し、精錬標本として一式にまとめたもの

が上記の金鉱石組標本です。稼働当時の鉱脈の品位と精錬技術を現物で伝える極めて学術的価値が高い資料ですが、長らく土蔵に収められていたためケースやラベルの劣化が進行していました。地域の歴史に関わる資料は現地での保管・活用が望ましいものの、昨今の博物館を取り巻く諸事情から受け入れ先を見つけるのが難しい現実もあります。こうした背景から、確実な管理と活用を見据え、昨年度当館へのご寄贈いただく運びとなりました。兵庫県の多田銀銅山は、平安時代から続いたとも言われる大規模な鉱山地域で、1973 年に閉山しました。地元の多田銀山史跡保存顕彰会が長年にわたり高品位鉱石を大切に保管されていましたが、2024 年の組織解散に伴い、今後の研究・教育への活用を託される形で標本を当館へご寄贈いただきました。多田銀銅山は本学の授業で見学に訪れることもある近畿地方有数の大鉱山であり、その一級標本は非常に貴重なものです。このような歴史ある標本を、責任を持って保存・活用させていただこうと考え、金・銀・銅に注目した本展示の形が定まりました。

これら新たな寄贈標本の存在を受け、改めて収蔵室のコレクション（旧採鉱冶金学科由来）も見直しました。日本全国の主要鉱山を網羅する膨大な収蔵品の中から、品位の高さや見栄え、産地の珍しさなどの観点から選別を重ね、今回の展示を構成しました。

鉱石標本は一見すると目的の金属がどこにあるのか分かりにくいので、標本に印をつける等の視覚的工夫をするべきでしたが、時間的に手が回らなかったのは反省点です。その一方で、展示室には易しめの内容のワークシートを設置していました。まだ少し難しいという声もありましたが、会期中に何度か在庫切れを起こしつつ最終的に 200 枚以上を配布できたため、鑑賞のサポートとして一定の役割を果たせたのではないかと感じています。

本展示の開催にあたり、チラシの配布等で公益財団法人 益富地学会館に多大なるご協力をいただきました。また、鹿折鉱山の金標本は東京大学総合研究博物館よりご貸与いただきました。展示準備では西尾真輝さん（理学研究科）に協力していただきました。ご寄贈いただいた標本を速やかに活用し、展示という形で関心のある多くの方々へ素晴らしい標本の存在をお伝えできたことを大変嬉しく思います。

（総合博物館 助教 竹之内惇志）



図 1：展示の様子

永益英敏教授最終講義

Ars longa, vita brevis (芸術は長く、人生は短い)

開催日:2026年3月13日(金)

3月13日、総合博物館北館3階の講演室を会場として、永益英敏教授の最終講義「Ars longa, vita brevis」が開催されました。

本講義は自身の研究を振り返る内容でした。学生時代の屋久島などでの日本国内における調査に始まり、スマトラ島やボルネオ島など東南アジアでの研究、そして帰国後の芦生演習林での活動について、共同した研究者の名を挙げながら語られました。また、この数年の研究成果として、世界各地のおよそ350名もの共著者とともに、熱帯樹木の構成パターンについて傾向を解き明かした2024年の論文(*Nature* 625: 728–734)が紹介されました。

こうした近年の研究手法は、インターネットにより世界中の文献や標本画像にアクセス可能となった時代の進歩を体現しており、かつての自身の研究が現代の先端的な論文に貢献しているといえます。1544年に世界初のハーバリウム(植物標本庫)がイタリアのピサ大学につくられてから約500年、そのうち約100年にわたり、

現在の総合博物館に続く本学の植物標本庫は、アジア諸国と連携して日本の植物学を支えてきました。永益教授自身が植物標本とともに植物学に取り組んできたわずか46年間もまた植物学の長い歴史の一部であったと、講義題目の「芸術は長く、人生は短い」に重ね合わせて、研究活動を総括されました。

(総合博物館 特定講師 齋藤歩)



最終講義後の参加者との集合写真
撮影:岩倉正司(情報環境機構)

文化財発掘 XII「模型からみる文化遺産」講演会

開催日:2026年4月4日(土)、5月30日(土)

遺跡や考古資料の模型を中心に約70件の資料を展示した今回の企画展、あまり前例のない展示会で、かなりの好評をいただきました。模型のさらなる魅力や奥深い背景を知っていただくために、関連講演会を行いました。

4月4日(土)は展示を企画した吉井秀夫教授(文学研究科)と、考古資料の3D情報を駆使した研究を展開する上野祥史准教授(国立歴史民俗博物館)の講演があり、濱田耕作の時代には三「ダイメンション」と呼んだ3D情報の記録にあたり、考古学が挑んできた長きに



講演会の様子(4月4日)

わたる取り組みと最新の状況が明らかになりました。

5月30日(土)の講演会では、模型研究の第一人者である平田健氏(東京都教育委員会・(公財)古代学協会)と川勝美早子館長(島津製作所創業記念資料館)をお迎えし、模型製作と利用の歴史や島津製作所標本部の活動実態についてお話いただきました。各回の講演会後には展示室に移動し、ギャラリートークさながらの解説が行われ、模型の魅力を直接伝える貴重な機会となりました。

2014年度から毎年春に開催してきたシリーズ「文化財発掘」では、構内遺跡の調査成果の紹介を中心に、さまざまな文化遺産を展示してきました。今回の第12回をもって、ひと区切りつけることとなりました。展示ならびに関連講演会の開催にあたりご尽力くださった方々、そして毎年展示室に足を運んでくださったみなさまに篤く御礼申し上げます。構内遺跡の発掘はこれからも続き、今回展示の対象とした模型についても、今後は目録の作成に向けてさらに検討を深めていきます。

(総合博物館 教授 村上由美子)

新任スタッフ紹介

太田 圭（研究員） 6月1日着任

文化史担当の研究員として着任しました太田圭（おおた・けい）です。日本列島を中心とした北東アジアの考古学が専門です。最近では、新しい植物資源利用の導入が先史・古代の社会や人びとの暮らしに与えた影響を考古学的に解明することを目指しています。マメ類やシソ属、大陸系穀物（イネ、キビ、アワ、ムギ類）などの栽培植物がどのように受容され、その結果として社会の構造や人びとの暮らしがどのように変化したかという点に着目しています。

これらの研究を進めるためには、人類学、生物学、分析科学、古気候学、地質学、地理学、民俗学、文献史学など様々な学問の考え方や研究成果が必要不可欠です。このように考古学は様々な分野と共同で研究する学問であると同時に、扱う資料も多様で材質や状態に応じた保管が求められます。古文書や古地図などの資料とともに



文化史資料の保管環境の管理が、私の重要な業務となります。所蔵資料をこれからの学問の発展や研究成果の持続的な発信に活用するため、個々の資料に合わせた取り扱いを心がけています。

野田 昌裕（研究員） 4月1日着任

4月より研究員として勤務することになりました、野田昌裕（のだ・まさひろ）と申します。京都大学人間・環境学研究科でオオサンショウウオの化石研究を行い、今年の3月に博士の学位を取得しました。専門は古脊椎動物学ですが、オオサンショウウオをはじめとした現生種の野外調査や研究にも携わっています。

博物館着任後は、主にミャンマーから産出した新生代の小型爬虫類化石の研究を進めています。ミャンマー中部には、始新世から更新世までの陸成層が分布しており、東南アジア大陸部における脊椎動物相の変遷を辿ることができる貴重な地域です。私が専門とするヘビやトカゲといった小型爬虫類の化石も複数発見されており、現生種に至るまでの進化の道筋を紐解く鍵となることが期待されます。また、技術補佐員として子ども博物館でも活



動しています。自身の研究成果をわかりやすく紹介するとともに、研究の面白さや大学博物館の魅力を伝えることを心がけています。研究とアウトリーチ活動の両面から、総合博物館の発展に貢献したいと考えています。

塩瀬 隆之 4月1日着任

（情報発信系／研究資源アーカイブ系 教授）

情報発信系に加えて研究資源アーカイブ系も兼務させていただくことになりました。京都大学の教育研究で生まれた一次資料を研究資源化し、研究・教育に活用いただける環境づくりに努めます。新たに公開された閲覧システムも活用し、デジタルと展示の両面から本学の研究教育環境の魅力を発信してまいります。

齋藤 歩 4月1日着任

（研究資源アーカイブ系 特定講師）

引き続き、当館の「京都大学研究資源アーカイブ」事業の担当教員として、本学に遺された研究資源を整理・公開し、教育研究の基盤形成にアーキビストの立場から尽力いたします。アーカイブズの利用促進に向けた教育活動や、研究データとアーカイブズの関係性についての学術研究も進めたいと考えております。

招へい研究員の紹介

ルウ・クアン・ヴィン 客員教授

招へい期間:2026年4月1日(水)～9月30日(水)

総合博物館の招へい研究員(客員教授)として、ベトナム国立林業大学のルウ・クアン・ヴィン氏が6カ月間の予定で滞在中です。アジアにおける両生類と爬虫類の生物地理と進化に関する研究を実施するとともに、両国の系統分類学に関する学術交流を総合博物館や西川完途教授(地球環境学堂)をはじめとした学内の研究者と進めています。5月13日(水)には総合博物館セミナーで「ベトナムとラオスのカルスト地帯の爬虫両生類相の調査と保全」についての研究発表を行いました。

(総合博物館 教授 本川雅治)

I first had the opportunity to meet Professor Masaharu Motokawa at Vietnam National University of Forestry (VNUF) in 2022 and later Professor Kanto Nishikawa. During these meetings, we discussed potential collaborations in research, graduate training, and academic exchange between VNUF and Kyoto University.

Building on these initial discussions, we have since organized two academic seminars at VNUF, creating valuable opportunities for scientific exchange and strengthening institutional ties between our universities. Through this collaboration, one faculty member and one master student from VNUF have been supported to pursue doctoral studies at Kyoto University under the supervision of Professor Kanto Nishikawa in 2023.

I was honored to be invited as an International Visiting Researcher at the Kyoto University Museum from 28 October to 10 November 2024. During my stay, I had the opportunity to examine museum collections, study preserved specimens, and interact with researchers and curators at the Museum. I also presented my research at the 63rd Annual Meeting of the Herpetological Society of Japan, held at the University of Hyogo, and delivered a seminar at the Nishikawa Laboratory, Kyoto University.

As part of our academic exchange activities, we jointly organized a seminar entitled “Speciation by Geographic

Isolation” on 18 March 2025 at VNUF. The seminar introduced concepts and recent advances in evolutionary biology and speciation research to faculty members, researchers, and graduate students. A second seminar was organized on 18 March 2026 on “How to study species diversity of vertebrates”, focusing on field survey techniques, specimen collection, biodiversity assessment, and modern approaches used in vertebrate research and conservation.

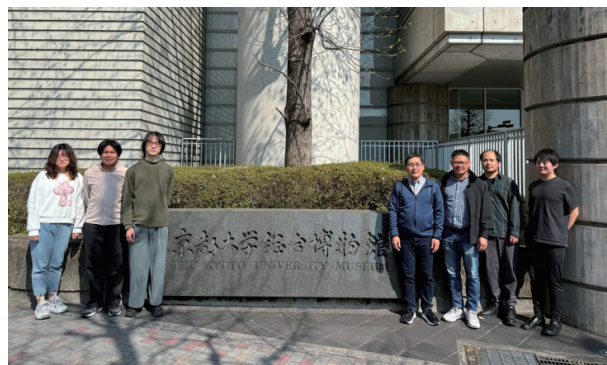
To further strengthen our partnership, I am currently serving as a Visiting Professor at the Kyoto University Museum from April to September 2026. During my stay, I have been actively involved in a variety of academic activities, including research seminars, scientific discussions with faculty members, researchers, and students, and collaborative research on the topic “Biogeography and Evolution of Amphibians and Reptiles in Asia.”

These collaborative activities have significantly enhanced academic exchange, research capacity, and graduate training between Kyoto University and Vietnam National University of Forestry. More importantly, they have established a strong foundation for long-term scientific cooperation between Japan and Vietnam in the fields of biodiversity, evolution, and nature conservation.

(総合博物館 招へい研究員 LUU, Vinh Quang)



総合博物館セミナーでの研究発表



総合博物館の本川研究室メンバーとの研究交流

インドシナ陸生脊椎動物種多様性の 国際共同研究が終わる

総合博物館ではインドシナ半島山岳部における陸生脊椎動物種多様性の国際共同研究を、本川が主持して、2023年度より3年間のプロジェクトとして実施し、2026年4月に終了しました。長尾自然環境財団の助成によるベトナム科学技術院生物学研究所、ラオス国立大学との共同研究、日本学術振興会のベトナムとの二国間共同研究事業によるベトナム科学技術院生物学研究所との共同研究として行われました。

3年間で8回の野外調査を南北方向に連なる高山をもつベトナムとラオスのインドシナ山岳部で実施しました。ベトナムとラオスの国境を超えた陸上脊椎動物の分布実態の解明につなげることが出来ました。調査によって収集された標本は、研究に用いると同時に、ベトナムとラオス両国の動物標本コレクションとして、標本を適切に保管できる収蔵環境の整備・改善も実施しました。野外調査から論文執筆までの研究、標本収蔵施設の構築には、陸上脊椎動物種多様性研究の将来を担う日本を含む

む3カ国の大学院生や若手研究者も参加しました。

また、研究交流と研究技術の向上のために、2024年と2025年にはラオスとベトナムの研究者が来日し、京都大学などで共同研究を実施し、日本哺乳類学会や日本爬虫両棲類学会大会に参加して研究発表や研究交流を行いました。また、ベトナムとラオスの大学で学部生や大学院生を対象とした脊椎動物種多様性ワークショップを2024年にハノイ自然科学大学とラオス国立大学、2025年にベトナム国立林業大学を加えた3大学、2026年にハノイ国立教育大学を加えた4大学で実施しました（9ページ参照）。

共同研究は現在も継続して行われており、論文執筆も進めています。3年間の研究プロジェクトは終了しましたが、日本、ベトナム、ラオスの多国間の協力体制を構築することができ、新たな研究プロジェクトに向けた準備も進めています。3年間のプロジェクトを一緒に進めてきた地球環境学堂の西川完途教授、日本、ベトナム、ラオスの共同研究者、ポスドク、大学院生に感謝します。

こうした共同研究は本川が2006年にベトナムで開始した野外調査から、いくつかのプロジェクトを経て発展していったもので、ベトナムとの共同研究は今年で20年目になります。ベトナムでの科学技術の発展への長年にわたる貢献を称えて国外の研究者に与えられるベトナム科学技術院記念メダルが本川に授与されました。授与式は2026年5月4日にベトナム科学技術院生物学研究所（ハノイ市）で行われ、Chu Hoang Ha ベトナム科学技術院副会長より、ベトナムでの生物多様性の研究と保全におけるベトナムと日本の持続的かつ効果的な協力関係への貢献に対して、記念メダルが授与されました。

（総合博物館 教授 本川雅治）



ベトナムのザライ省での野外調査（2025年10月）



日本哺乳類学会への参加（2025年8月）



ベトナム科学技術院記念メダルの授与式（2026年5月）

ベトナム・ラオスの4大学での 脊椎動物種多様性ワークショップに参加して

2026年3月に長尾自然環境財団の支援のもと「How to study species of diversity of vertebrates?」の学部生や大学院生を主な対象としたワークショップが、ハノイ自然科学大学（3月16日）、国立ハノイ教育大学（3月17日）、ベトナム国立林業大学（3月18日）、ラオス国立大学（3月20日）で実施されました。日本、ベトナム、ラオスの3ヶ国から研究者と大学院生が講演と実習を提供し、日本からは京都大学・総合博物館の本川雅治教授、地球環境学堂の西川完途教授、総合博物館の市岡幸雄研究員、理学研究科博士課程のLevy Vega Necesito氏と私の大学院生2名が参加しました。

本セミナーの前半では、それぞれの研究者がどのようにして生物の研究をするまでになったのか、なぜその生物の研究をするのか、といった話題に焦点を当てた発表を行いました。私はウミガメという、名前は知っているものの一般には触れる機会の少ない生き物を研究する人間として、ウミガメとどのように出会ったのか、なぜウミガメを研究するのか、ワークショップに参加している学生と近い年代として、生き物を好きで研究することの楽しさを伝えました。また3Dプリンターで出力したウミガメの頭骨模型を発表中に触れてもらい、写真からモデルを作る技術や解析手法なども紹介しました。ほとんど触れる機会のないウミガメ頭骨を熱心に観察する学生たちの姿を見て、ウミガメ研究の楽しさを伝えられたかと感じました。

後半は実際の標本の観察や分類などを行う実習形式で、哺乳類、爬虫類、両生類の3つのグループ（国立ハノイ教育大学では魚類を加えた4グループ）に分かれて



ラオス国立大学でのワークショップ（集合写真）

実施しました。受講生は主に大学生で、各グループの人数は4～10名でした。私は爬虫類を担当し、学生達に標本を丁寧に観察してもらいながら、ヘビ・トカゲ・ヤモリなどのグループに分けたり、標本を観察しながら生態について一緒に考えたりしました。参加した学生の中にはヘビなどの標本を最初は怖がって触れない子もいましたが、次第に慣れていき最後には興味深く観察している姿が見られました。普段は観察しにくい部分も標本なら観察することができ、標本の重要性を感じてもらえたと思います。

私は本ワークショップを通して多くのことを学びました。ワークショップはすべて英語で行われたため、参加した学生ともども慣れない英語での交流は大変なことも多かったですが、現地語や身振り手振りを交えた会話は非常に良い経験となりました。また、学生からの素朴な質問や気づきは、答えられないものも多く、改めて生き物の観察の大切さと勉強不足を感じさせられました。この経験をもとに、今後の研究に励んでいこうと思います。

（人間・環境学研究科 修士課程 山下和輝）



ウミガメ頭骨模型を観察する学生



実習形式での爬虫類標本の観察

総合博物館コレクション研究〈27〉

上塩冶築山古墳金工品の科学調査

資料の概要と調査に至る経緯

国史跡^{かみえん や つきやま}の上塩冶築山古墳（島根県出雲市所在）は、6世紀末頃の円墳で、出土品のうち出雲弥生の森博物館（以下、出雲弥生博）所蔵分については2018年に重要文化財に指定された（出雲弥生博2018）。当古墳の出土品は、ほかに京都大学総合博物館（以下、京大博）、東京国立博物館、東京大学総合研究博物館にもあり、比較検討を進めている。

京大博では次の7点を所蔵している。①金銀装^{ねじりかん}振環^{とうたち}大刀の刀身片（図1,2：15-5の一部）、②大刀の刀身片（47-1）、③金銀装辻金具（脚均等配置、47-2）、④金銀装辻金具（脚X字形配置、47-3）、⑤吊金具（47-4）、⑥鉄斧（47-5）、⑦鉄刀残欠（図なし）。これらは、1917年に所有者が京都大学へ寄贈したものである（15-5等の番号は（出雲弥生博2018）掲載時の図番号）。

今回、科学調査を実施した目的は、次のとおりである。出雲弥生博では当古墳の出土品保存修理事業を2024年

から進めており、その中で、金銀装振環頭大刀の安定台を作製する方針が決まった。①は、出雲弥生博所蔵の金銀装振環頭大刀（15-5、赤鞘の大刀）と接合する（2016年4月に確認済み、出雲弥生博2018）破片であることから、安定台の作製に際しては、①の形状を計測して台の一部とし、大刀の全体像を示す必要があった。その目的のために①の三次元形状計測を行うこととした。併せて、これら7点の素材や構造を確認するため、蛍光X線分析や実体顕微鏡およびデジタルマイクロスコプでの観察と撮影も実施することとした。出雲弥生博所蔵品は、すでに保存処理が行われており、本来の表面観察がしにくい状況である。一方、京大博所蔵品は、未処理で薬品が資料の表面を覆っていないため、詳細な資料観察ができることが期待された。

調査は、京大博において2025年2月17～20日の4日間、出雲弥生博、奈良県立橿原考古学研究所（以下、橿考研）、京大博の3機関が共同して下記の10名のメンバーで実施した。

出雲弥生博：坂本豊治

橿考研：奥山誠義、吉村和昭、水野敏典、河崎衣美、
中尾真梨子、小倉頌子、平井洸史

京大博：村上由美子、高野紗奈江

本稿では特に成果のあった2点について、調査成果の概要を紹介する。また、本調査は奈良県藤ノ木古墳出土の金工品（国宝）と比較することで、当時の金工技術の解明も目的としている（JSPS 科研費 21H04369 による）。

①金銀装振環頭大刀の刀身片

①の刀身片（図1,2）は、残存長7.1cm、幅4.7cm、厚さ1.7cmを測る。細部を観察して構造をみると、刀身だけでなくその上に有機質がよく残っている状態であり、鞘木の直上に織物が巻かれ、その上に金銅板とそれを留めた金



図1：①金銀装振環頭大刀の刀身片画像

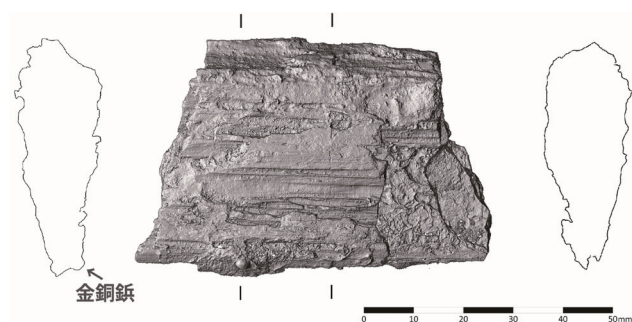


図2：①の3次元形状計測CG画像

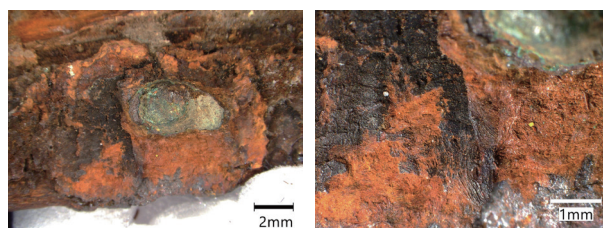


図3：①の鞘木に残る金銅板、金銅鈔（左）と織物（右）

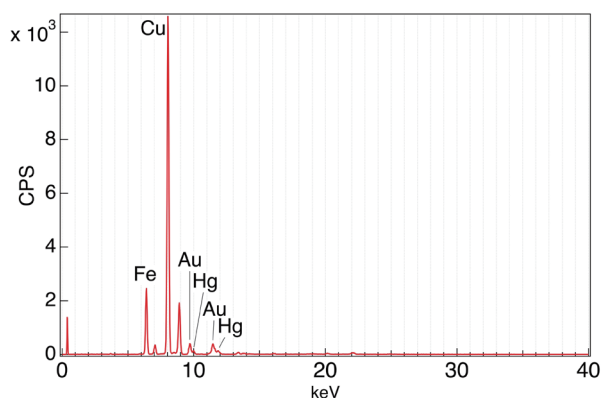


図4：①の金銅鋳の蛍光X線スペクトル

銅鋳が残存していることがわかった。これらの金属は、蛍光X線分析により、Cu（銅）を多く含みAu（金）も伴うことから、青銅に鍍金（金メッキ）を施した金銅であることが確実となった（図4）。この刀身片は、水銀朱が塗られた「赤鞘の大刀」（出雲弥生博 2024）の一部であり、水銀朱の残存が期待されたが、残念ながら鞘木および織物に水銀朱の付着は確認できなかった。

京大博所蔵品のうち、この破片のみ三次元形状計測を行い、得られた計測データを用いて正確な大刀の安定台を作製することが可能となった。

②大刀の刀身片（47-1、図5～7）

①とは別個体の大刀の一部で2片あり、図5のように接合する。接合した状態で全長15.5cm、幅3.4cm、厚さ約2.7cmを測る。鞘木の表面には織物が巻かれ、刃部側には波状の糸の痕跡を確認した（図6）。これは、織物を縫ったもの（端切れかがり縫い）と推測する。このような糸の痕跡を確認できる資料は、奈良県藤ノ木古墳刀子と伝群馬県西平井出土象嵌大刀が知られている。



図5：②の大刀の刀身片（47-1）



図6：②に見られる波状の糸の痕跡（端切れかがり縫い）

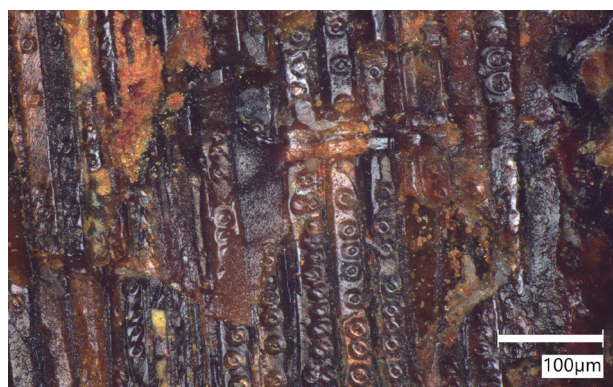


図7：②にのこる鞘木の拡大写真

鞘の片面は剥離しており（図5）、その剥離した部分に厚い金銅板が付着している。大刀の附属品とは考えにくい。鞘木をデジタルマイクロスコップで確認すると、放射仮道管（単列）が確認できた（図7）。分野壁孔はスギ型かと思われ、鞘木の用材としてスギが選択された可能性が推測できる。

おわりに

今回の調査によって、これまで情報が少なかった京大博所蔵の上塩冶築山古墳金工品について多くの知見を得ることができた。ただし、いまだX線撮影は行っていないため、構造などについて不明な点も残る。今後、それを含む総合的な調査ができることを期待する。

近年調査した総合博物館の所蔵品では、漢代の鉄製長剣に木製の鞘が良好な状態で残り、漆塗や布巻きの様子もよく観察できることがわかった（坂川・村上 2024）。さらに、これらの大陸出土品と列島各地の出土品の比較検討も進めている（坂本ほか 2025）。引き続き藤ノ木古墳出土品をはじめ、古墳時代の金工品技術の解明につなげていきたい。こうした検討を進めていく上で、今後も肉眼観察と科学調査を継続的にやりたいと考えている。

（出雲弥生の森博物館 学芸員 坂本豊治
奈良県立橿原考古学研究所 総括研究員 奥山誠義
奈良県立橿原考古学研究所 主任研究員 平井洸史
京都大学総合博物館 教授 村上由美子）

参考文献

- 出雲弥生の森博物館 2018『上塩冶築山古墳の再検討』出雲弥生の森博物館研究紀要第6集
- 出雲弥生の森博物館 2024『出雲弥生の森博物館 2024 春季企画展「科学の力で解き明かす出雲の歴史」パンフレット』
- 坂川幸祐・村上由美子 2024「総合博物館コレクション研究〈21〉濱田耕作将来漢代鉄製長剣の紹介とその保存・活用について」『京都大学総合博物館ニュースレター』No.61
- 坂本豊治・奥山誠義・水野敏典・北井利幸・河崎衣美・小倉頌子・中尾真梨子・平井洸史 2025「出雲市上塩冶築山古墳出土の赤鞘の大刀と錫装刀子」『古代武器研究』Vol.20

総合博物館レクチャーシリーズ(第168回)

実は資源が多い日本列島

博物館の鉱石試料からわかる地球の変動と金属資源の使い方

開催日: 2026年5月16日(土)

今年度最初のレクチャーシリーズは、工学研究科の小池克明教授をお迎えし、「実は資源が多い日本列島」というタイトルでご講演いただきました。小池先生は資源に関する研究に取り組み、昨年度は総合博物館の鉱石資料を用いて日本の鉱山を特徴に基づきクラスタ分類して、成因を探る研究について論文を出版されています。

ご講演では、当館資料を用いた研究成果にとどまらず、



講演の様子

「鉱石に含まれる資源がどのように生まれたのか」という形成過程の話から、現代と未来の資源問題について、日本の都市鉱山や海底資源に注目しつつご紹介いただきました。当日は二階の渡り廊下にまで席を用意しなければならぬほどの超満員で、70名を超える方々にご来館いただきました。これほどの大盛況となった背景には、昨今の資源に対する世間の関心の高さが重要な要因として挙げられると思われます。また、開催中のコレクション展の関連講演であったことに加え、事前に益富地学会館主催の鉱物のイベントにてチラシを頒布いただけたことで、興味・関心の高い方々への確に情報を届けることができたことも大きな一因です。定員を超えた場合の対応については課題が残っておりますが、これからも効果的な広報活動を通して、この様な貴重な機会をより多くの人へ届けられるように努めてまいります。

(総合博物館 助教 竹之内惇志)

大学博物館等協議会・日本博物科学会に参加して

開催日: 2026年6月25日(木), 26日(金)

慶應義塾大学で開催された大学博物館等協議会・日本博物科学会に参加した。シンポジウムでは、当館の塩瀬を含む4名の登壇者から、展示を通して人々の関わりを育む各館の実践について事例が共有された。難解な研究の展示方法を工夫する京大、学生主体の展示を実践する金沢大、2019年に発足したミュージアム・コモンズ KeMCo を(創造的)空き地に見立てた慶應、収蔵品の維持管理と成果発表に重きを置く藝大など、各館の特色が印象に残った。

研究発表の部では、当館の本川が国際ネットワークの構築と人材育成について、伊藤がパネル廃材の有効活用に関する取り組みについて、それぞれ報告を行った。質疑応答を通じ、どの館も同様の課題を抱えていると実感できたこと、そして目から鱗のパネル資材削減方法を教えていただいたことは大きな収穫だった。他館の発表で特に目を引いたのは、一般社団法人を設立して世界遺産の保護活動を進める山形大学の取り組みである。博物館

活動を行うにあたり、大学という枠組みにとらわれる必要はないのだという学びを得た。

最後に、塾史展示館や KeMCo を見学した。塾史展示館は、1912年竣工の図書館旧館内に置かれている。遊び心満載のタッチパネル展示が面白かった。

(総合博物館 助教 伊藤毅)



図書館旧館

子ども博物館だより〈11〉

体験と知識を結びつける

私は自身の研究分野である西洋美術史に関連したワークショップを主催しています。一枚の絵には当時の政治、宗教、風俗、自然観や人間観といった数多くの要素が凝縮されており、こうした背景を知ると、絵の美しさの奥にある一層多様な姿が見えてきます。

私は学部生時代、京都大学で動物の心理学を勉強しており、その後は2年間の社会人経験を積みしました。そこから西洋美術史の研究の道に進むことを決意したのですが、そのきっかけは、一枚の絵画が同時代を取り巻く多面的な要素を内包し、人々の多様な要請に応える“多機能な媒体（メディア）”であることに魅了されたことでした。

そのような濃密な西洋絵画のおもしろさを伝えるべく、現在子ども博物館では古代ギリシア・ローマ時代の大理石彫刻から現代にいたるまでの西洋美術の歴史を、重要な歴史的出来事と関連付けながら、できる限り多くの図版を用いてお話しています。

もちろん子ども博物館には非常に幅広い年齢のお客様が訪れるので、皆様の学年に合わせて、「西洋って何だ

ろう？」「好きな絵はある？」などと問いかけながら、単なる“勉強”とは異なる楽しい学びの時間をめざして日々模索しています。

そして、美術の歴史を学んだあとは、「デカルコマニー（*décalcomanie*）」技法の体験をさせていただいています。この技法は、絵具を画用紙に無作為に塗ってから別の画用紙に写し取る非常に簡単なものなので、幼稚園や小学校の学習で用いられることがあるようです。元来このデカルコマニーは、第一次世界大戦後の精神的危機の中で生まれた「シュルレアリスム（*surréalisme*）」という美術潮流の中で発展した技法です。画家の意図の外で偶然にできた模様を絵画に利用するこの技法は、悲惨な大戦で「人間の理性への信頼」が崩壊した時代背景を反映しているのです。

以上の取り組みを通して、体験と知識を有機的に結びつけることで、無限に広がる学びの世界の入り口に立つ感覚を皆様に経験していただけたらと考えています。

（文学研究科 博士課程 川浦怜実）

元素周期表であそぼう！

私が「元素周期表であそぶ」展示に関わるようになった背景には、これまでのいくつかの出会いがある。私は現在、化学を専門としているが、その遠因の一つは、小学生のころに読んだ元素周期表の本であった。当時、友人達がポケモンの名前や特徴を覚えて楽しむ中で、私は元素の名前や性質を調べて覚えることに夢中になっていた。元素には一つ一つに個性があり、何に使われているかを知るだけでも、世界の見え方が少し変わるように感じていた。

高校時代には、元素周期表に強い関心をもつ恩師から大きな影響を受けた。元素周期表は単なる暗記表ではなく、元素同士の関係性や化学の考え方が詰め込まれた地図のようなものである。その見方を教わったことで、私は元素周期表をさらに面白いものとして捉えるようになった。

その後、学芸員資格を取得する過程で、子ども博物館の活動と、「一家に一枚元素周期表」の制作に携わられた桜井弘先生を知った。桜井先生が用いておられた「えれめんトランプ」は、元素を学ぶ教材でありながら、ゲー

ムとしてもよくできている。UNOに近い遊び方が説明書に載っているが、それ以外にも、カードと周期表を見比べて同じ絵柄を探したり、金・銀・銅が同じ縦の列に並ぶことから、族という考え方に気づいてもらったりすることができる。また、Sb（アンチモン）やMn（マンガン）のカードをきっかけに、博物館内の輝安鉱や菱マンガン鉱の展示を探してもらうことも行った。

子ども博物館でのやりとりでは、子どもだけでなく大人とのやり取りも印象に残っている。鉱物のLecture seriesが同時に開催されていたときには、年配の方々から二価と三価の鉄が存在する理由について質問を受けたこともあった。元素周期表や鉱物を入口にすると、世代を問わず自然に化学の話題へつながっていく。ゲーム中にも、それぞれの元素の特色や面白さを伝えることを大切にしている。

かつての自分が元素周期表の本から化学に惹かれたように、この展示が誰かにとって、元素や化学、さらには学問そのものに興味を持つきっかけになれば嬉しい。

（理学研究科 博士課程 桑江優希）

研究資源アーカイブ通信〈36〉

アーカイブズの整理技法に関するノート(3)
索引の自動作成

2024 年 11 月、「増田友也建築設計関係資料, 1930–1984 (主年代 1950–1981)」(以下, 増田資料) の目録を公開した^{*1}。目録は, ①容器リスト (container list) 960 行, ②アイテム・リスト 1,221 行, ③プロジェクト索引 (project index) 180 行で構成され^{*2}, 資料の番号や表題から検索するツールが①②, 建築作品, コンペ案, 出版・展覧会等の呼称から関連資料を探すツールが③といえる。

このうち①②は研究資源アーカイブの ArchivesSpace に登録し^{*3}, 各リスト 1 行分の情報をウェブサイト 1 ページに表示させた。残る③は①②と異なり, 情報をそのまま ArchivesSpace へ登録することが難しい^{*4}。そのため①②の「範囲と内容」(記述項目のひとつ)に, 関連するプロジェクトの情報を記した [表 1]。これにより, プロジェクト名からも資料が検索可能となった。

増田資料におけるリスト①②と索引③は, 本ニュースレターの前稿や拙著『建築レコードの整理技法』(東京大学出版会, 2026) で, その作成過程について論じた。そのため本稿では, 実用性が高まる対話型生成 AI を用いて, アーカイブズ業務における目録作成の効率化を検討する。使用したのは Google 社の Gemini であり, ほかのツールを必要とする場合も, 本学の構成員が利用しやすい Google のサービスを用いた。少なくとも本学において, 本稿の成果を再現可能とするためである。

プロジェクト索引の作成

③の索引では, 関連資料の容器番号がプロジェクトごとにまとめられる。例えば, プロジェクト「京都大学総合体育館」に関する資料は「図面 (原図 1 点ごと)」「図面 (青図冊子)」「会社記録」「写真 (紙焼箱入り)」として存在し, その容器番号が示される [表 2]。このように, 関連資料が複数の容器内に存在することもあれば, ひとつの容器番号が複数のプロジェクトに関連することもある。また, 関連資料が存在しないプロジェクトもある。

索引は, リスト①②から同一プロジェクトの容器番号を集約して作成される。プロジェクト番号順に①②を並び替えれば簡単に集約できそうだが, 複数のプロジェクトに関連する資料 (アルバム等) があり, 実際の作業は煩雑となった。索引の利便性を考慮し, 容器番号を七つの資料タイプに分けたことも索引作成の難易度を高めた。

索引の自動作成

目録完成からまもなく, 対話型生成 AI サービスがたちまち普及した。職種を問わず業務支援への応用が模索されるなか, アーカイブズ業務もその例外ではなく, 単純作業が多い目録作成は, その一部を AI に任せられるのではないかと考えた。増田資料のリスト①②と索引③は, 検索のアプローチが異なるだけで対象資料群は同一で, そのうえ両者の相互関係は単純であるため, ①②が完成すれば③を (自動的に) 生成させられるかもしれない。

そこで, 索引作成の自動化を次の手順で検討した。

第一に, ①容器リストとプロジェクト名リストとを準備した。索引の対象を①のみとしたのは, ②を含めずとも①だけで増田資料全体を網羅できるためである。

プロジェクト名リストを必要としたのは, 資料が存在しないプロジェクトを把握し, 寄贈等の資料追加に備えるためである。プロジェクト名は, 作品集『増田友也の建築世界』(英明企画編集, 2023) の「増田友也研究室作品リスト」を参照した。その結果, 「同志社女子大学楽真館」ほか 11 プロジェクトに関する資料の不在が明らかになった。

第二に, 自動作成の工程を可視化するため, Python による索引作成用のデータ処理スクリプト (プログラム・コード) を Gemini で生成し, Google Colab で実行した。

コードの修正を繰り返し, 2024 年の索引 (手作業版) と同一機能の索引 (自動生成版) が完成した。コードの実行は数秒たらずであり, 2024 年には担当者 2 名で数日を要した索引作成の作業を数時間に圧縮できた。そのうえ, 両者を比較したところ, 当初の索引に誤りを見つけた。「鳴門市立北灘東小学校・幼稚園」において, 複数の容器番号を区切る記号 (カンマ) にピリオドを用いていた (「953-13. 954-22」)。手作業独特の落ち度で, 人間が使う索引機能には影響しない程度のミスである。

自動作成の再現

索引作成の材料は, 資料群が変わっても, 容器リストと索引語リスト (増田資料ではプロジェクト名リスト) で共通するが, 各リストの項目や内容は事例ごとに異なる。そこで, いかなる場合でも索引作成を再現可能とするため, 増田資料で生成した索引作成コードの要点をまとめた。

表 1：容器リストの項目と記述例（箱 3「京都大学 70 周年記念体育館」。「範囲と内容」にプロジェクト情報（番号と正式名称）を記述した

容器番号 箱 フォルダ	資料番号	表題	作成日	範囲と内容 (プロジェクト番号_プロジェクト名)
3	Ar MIXED 2017/2/S3-01/003	京都大学 70 周年記念体育館	n.d.	082_京都大学総合体育館

表 2：プロジェクト索引の項目との記述例（京都大学総合体育館）。表 1 の容器リストから、「箱 3」等の容器番号を集約した

プロジェクト情報		竣工年	保存場所（容器番号）						
番号	名称	計画年	1-1	1-2	1-3	2	3-1	3-2	4
082	京都大学総合体育館	1972.03	1, 2, 3, 4, 5-1, 5-2, 19	—	530, 563, 573, 598, 601, 610, 642, 650, 699, 702, 739, 782, 797	309-2	—	958-22, 959-1, 959-2, 959-4, 964-4, 965-3	—

[凡例（保存場所）] 1-1：図面（原図 1 点ごと） 1-2：図面（原図ケース） 1-3：図面（青図冊子） 2：会社記録
3-1：写真（アルバム） 3-2：写真（紙焼箱入り） 4：設計図書（京大施設部由来）

A——容器番号の結合

容器リストの容器番号を「箱 - フォルダ」の形式に結合し、プロジェクト索引の容器番号として記述する。

B——容器番号の集約

プロジェクト索引 1 行（プロジェクト 1 件）に複数の容器が関連する場合、それらの番号を集約する（表 2 の「保存場所」参照）。

C——容器番号の分配

上記 B とは反対に、容器 1 点に複数のプロジェクトが関連する場合、プロジェクト索引の異なる行へ、同一の容器番号を分配する。

スマホ表示への最適化

完成した索引は表形式のため、ArchivesSpace でプロジェクト名を検索することに比べ、全貌を把握しやすい。一方、行も列も数が多い巨大な表は、モニターでの視認性が低い。また、増田資料の現物は本学桂図書館の準貴重書庫で保管されており、書庫内において、現物の容器番号からプロジェクト名や資料情報を手軽に確認でき、反対にプロジェクト名から箱番号を検索できれば、実務上の利便性が高まる。そこで、Google の AppSheet を用いて、プロジェクト索引をスマホ表示に最適化させた。AppSheet はノーコードでアプリケーションを開発できるツールである。

スマホでの表示は、原則としてシンプルさとわかりやすさを優先したが、実用性を考慮し、表形式の索引にはない要素を加えた。第一は、プロジェクト名を絞り込むボタ

ンである。特定条件のデータを抽出するスライス（Slice）機能によって、京都大学や鳴門市のプロジェクトだけを表示できるようにした。第二は、ArchivesSpace の資料情報へのダイレクトリンクである。URL（各プロジェクト名による ArchivesSpace の検索結果）を容器番号に併記し、詳しい資料情報をタップのみで確認可能とした [図 1]。

*

本稿では、アーカイブズの索引について、自動作成とスマホ表示最適化（アプリ化）の概要を示した。実際の索引や生成コードの共有は最小限にとどめ、検討プロセスとその成果（索引やアプリ）に多くを割いたのは、異なる事例や AI 技術の変化に柔軟に対応していくためである。

（総合博物館 特定講師 齋藤歩）



図 1：スマホ表示画面。左から、トップページ（全プロジェクト）、絞り込みページ（京都大学）、詳細ページ（京都大学総合体育館）

* 1：「増田友也建築設計関係資料，1930–1984（主年代 1950–1981）」，京都大学研究資源アーカイブ．URL: <https://www.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/archives/1666/>

* 2：目録公開時の索引は 181 行であったが、今回の作業により、資料が含まれないプロジェクトを発見したため、180 件に修正した。

* 3：ArchivesSpace は、アーカイブズの情報管理と公開を目的に開発されたオープンソースソフトウェアである。公開された情報はブラウザ上で検索等が可能となる。ArchivesSpace, URL: <https://archivesspace.org/>

* 4：建築分野のアーカイブズにおいて、かねてより索引の機械可読化は検討されてきたが、いまのところ ArchivesSpace での再現は難しい。Waverly Lowell and Tawny Ryan Nelb, *Architectural Records: Managing Design and Construction Records*, Society of American Archivists, 2006, p. 103.

総合博物館日誌 (2026 年3月～6月)

展示

▶企画展「文化財発掘XII 模型からみる文化遺産」
2026 年3月11日(水)～6月14日(日)

〔関連講演会〕総合博物館講演室

第1回 2026 年4月4日(土)

「なぜ濱田耕作は文化遺産の模型を製作したのか」
吉井秀夫(京都大学大学院文学研究科)

「ものとひととの距離ー3D 情報は何を变えるかー」
上野祥史(国立歴史民俗博物館)

第2回 2026 年5月30日(土)

「考古学・人類学模型標本の歴史とその利用実態」
平田 健(東京都教育委員会・公益財団法人
古代学協会)

「島津製作所標本部の活動について」

川勝美早子(島津製作所創業記念資料館)

▶コレクション展「鉱床ー日本列島の金・銀・
銅鉱石」

2026 年4月22日(水)～6月14日(日)

子ども博物館 (活動報告)

実施回数: 14 回

参加者数: 子ども222 人/中高生3 人/大人275 人

スタッフ(のべ): 61 人

レクチャーシリーズ

第168 回: 実は資源が多い日本列島ー博物館の
鉱石試料からわかる地球の変動と金属資源の
でき方

2026 年5月16日(土)

・小池克明(京都大学大学院工学研究科)

総合博物館セミナー

第140 回: ベトナムとラオスのカルスト地帯の爬
虫両生類相の調査と保全

2026 年5月13日(水) 13:30～15:00

・Luu Quang Vinh(ベトナム国立林業大学森林
資源環境管理学部)

第141 回: 陸棲肉食哺乳類の適応帯の進化

2026 年6月24日(水) 13:30～15:00

・Paul Z. Barrett(国立科学博物館/日本学術
振興会外国人特別研究員)

協力イベント等

▶天皇盃第37 回全国車いす駅伝競走大会
2026 年3月8日(日)

展示協力(学術標本資料の貸出)

▶静岡市歴史博物館(5 点)

「企画展 没後五〇〇年 戦国大名 今川氏親」

2026 年4月25日(土)～6月7日(日)

▶九州国立博物館(1 点)

「特集展示 科学の眼でみる遼の金工品」

2026 年5月26日(火)～7月20日(月・祝)

入館者数

10,990 人(うち特別観覧: 24 団体/1,180 人)

総合博物館の刊行物

▶京都大学総合博物館 2025 年度企画展
「文化財発掘XII 模型からみる文化遺産」
2026 年3月11日発行



▶京都大学総合博物館収蔵資料目録第13 号
「中塚家資料目録」
2026 年3月31日発行



京都大学総合博物館ニュースレター ISSN 2758-0784

第67号 2026 年9月7日発行

編集・発行: 京都大学総合博物館

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

電話: 075-753-3272 FAX: 075-753-3277

E-mail info@inet.museum.kyoto-u.ac.jp

https://www.museum.kyoto-u.ac.jp/

*ニュースレターは、京都大学学術情報リポジトリ KURENAI でも公開しております。